

現場の研究をどのようにすすめたらよいか



佃 範 夫

一 どんなことを研究すべきだろうか

幼稚園教育において一体何と何をなすべきかについての問題は、すべての者が知っておかねばならぬ問題であるにもかかわらず、未だ解明されていない部分が非常に多いように思う。例えば何故幼稚園で子どもに絵を描かせるのかと尋ねてみると、その根拠は必ずしも十分とはいえない。しかし私たちは子どもに描かさねばならぬ所以のものをしっかりと把握しての指導でなければ、その教育活動は生命のないものになってしまう。真に生命のある教育のいとなみとするためには、まず幼稚園教育においてなさねばならぬ根本問題を把握しておくことが必要であろう。

ところでこの根本問題とは何であろうか。二、三年前、三才児、四才児、五才児、六才児、七才児の五グループについて聴音判別の実験を一年間試みたことがあるが、この実験で驚いたことは、三才児が一番良くて、一番悪かったのが七才児であったということである。勿論七才児といえども、この実験に加わったおともどもよりははるかに優秀であったのである。このようなことから聴音判別の能力は三才頃が一番鋭く年をとるに従ってだんだんに駄目になるといことがわかったのである。

このように人間の才能の発達には山があつて、ある時期には著しく発達する才能も、その時期を過ぎれば衰退していくものがあるということである。とするならば私たちはまず幼稚園時代に芽生えてくる才能は何であるかをみきわめることが必要で

ある。そしてその次にはその才能を十分に伸長させるために、どのような経験をさせればよいかの具体的研究をすることである。すなわち幼稚園時代を逃がしては後で取り返しのつかないものを見出して教育するという、いわば適期教育ということに對する基礎的研究が私たちにとって必要である。しかもその研究は現場の教師の特色をいかすためにも具体的に子どもを通してのものが望ましい。

二 どのようなようにして研究をすすめたらよいか

(1) 望ましい研究の姿

およそ研究というものは一朝一夕に出来るものではない。しかしややもすれば一挙に解決しようとして、失敗する場合が多いが、このような態度ではなくして、ほんの小さな具体的な手近な問題から、こつこつ始めることが必要である。しかしむやみやたらにやってみたとところで問題解決への道は遠い。それにはやはり研究の方向づけと組織的研究が必要で、そのためには、専門家の指導と同僚の協力が必要である。

したがって研究の望ましい一つの姿として、教育学・心理学の先生と、その領域についての専門家（幼児音楽についての研究

であれば音楽の専門家）と、現場の先生が、お互の特色をだしあつて研究を進めていくという形をあげることが出来る。勿論これらの専門家に絶えず参加していただいて研究を進めることは困難であるから、大事な問題の折に指導を仰ぐようにすればよい。

(2) 望ましい経験を見出すための調査研究のすすめかた

この一学期間はおおよそこんなねらいで教育しようという大きなねらいをまずきめ、大まかなカリキュラムで実施し（どうも現場の先生はあたかもカリキュラムのとりこになっている感じがするので、このようなことがないように）静かに子どもをみつめながら、子どもの発達段階に応じた望ましい経験は何であるか、例えば、絵画製作において四才児に思う存分表現させるのにふさわしい素材は何であるかを探し求める。そして望ましいと思われるものを与えてみて子どもを観察する。このような態度で保育をくり返していくうちに、解決しなければならぬ重要な問題点のいくつかが次第に浮彫にされてくる。この浮彫されたものを研究テーマとして定めればよいのであるが、この際専門家の指導を仰ぐことを忘れてはならない。というの

は専門家の指導を離れての研究はしばしば徒勞に終ることが多いからである。勿論専門家といえども必ずしも幼児のそれについてすべてを知っているわけではないから常に満足な解答が得られるとは限らない。たえず子どもと接触している現場の先生の体験の上に、これら専門家の専門的知識をとり入れていく態度こそ望ましいのである。

さて研究テーマが定まれば、主題を調べるのにふさわしい調査項目と、どのような仕方でのように調べていくかの調査方法が定められる。それにはまず何回かの真剣な研究会が必要で、ここで十分討議しなければならぬ。何故なら、これが不十分ならば決して立派な調査問題が出来ず、したがって研究を失敗に終らせる可能性が大きいからである。

ついで具体的調査の段階に入るが、これには同僚の全面的協力が必要である。特に子どもの行動や作品を先生が主観的に判断して記入する場合が多いので、評価基準の打合せや記入上の意見の統一が何よりも大切である。もしこの統一がなければ、統計の意味は全くなくなってしまうのである。要は如何に正しく子どもの作品なり行動を客観的に数量化していくかということである。一度調査用紙に記入されれば、あとはむしろ数学の

問題となってしまうのである。

次は資料の数量化とその解釈の段階であるが、研究メンバーで十分に資料を検討し、主観的にならないように、あくまでも客観的に解釈し、しかも拡大解釈をしないように心掛けることが大切である。

このような過程を通じて、幼稚園時代にやっておかねばならない望ましい経験の一つ一つが見出されてくるのである。

なおこれらの研究には、ケースをとらえ、それを継続的に追跡していく事例研究の仕方と、三才児、四才児などの集団を対象に研究を進めていく研究の仕方の二つがあるが、そのいずれか一つの方法によって研究を進めていくかあるいは並行して研究を進めていくことが望ましい。

(3) 望ましい経験を保育の中でどのように経験させて

いくかについての研究のすすめかた

幼児期に芽生えてくる才能の発見、したがって幼児期に経験させておかねばならない望ましい経験が見出されたならば、次はこれを具体的保育活動の中で、どのように取り扱えばよいか解決されなければならない。

いくら望ましい経験がわかったとしても、これを放置していたのでは何の役にもたたない。例えば、前述の聴音指導において三才頃が適期だということが明らかにされたとしても、これを幼稚園教育の中でどのように取り扱っていくかの問題が解明されなければ宝のもちぐされである。

ここに現場の先生が解決しなければならぬ、また現場の先生ならでは解決出来ぬ重要な研究領域が展開されてくる。すなわち望ましい経験を保育の中でどのように子どもに経験させていくかについての具体的研究である。

これらの研究においては、まず子どもの発達段階からの考慮と、幼稚園という集団教育の中でおこなうということの考慮が必要である。

この考慮の上になんて、まず自らやろうという意欲を子どもの中に起させるのはどうすればよいか、子どもに興味をもたせるには如何にすればよいかの研究からはじめられるのである。

ついで遊びの中で自然に子どもに経験させるためにはどのように保育活動を工夫すればよいか、またこれらをより効果的にするための環境整備とそのためのいろいろな教材教具の工夫を

どのようにすればよいかの研究が要請される。

そして最後に、これらの保育活動が、幼稚園における單元の中において展開するよう研究されなければならない。このようにして望ましい経験がスムーズに体験されゆく環境と、その中で興味的にしかも遊びの中で自然のうちに伸ばされてゆく方法が見出されるのである。

私たちが音感指導において色音符や色水遊びによって子どもに興味をもたせる工夫をしたのも、また音感相撲などの遊びを保育の中に折り込むことを試みたのもすべてこのような研究の一結果である。

以上、現場の先生がなすべき研究の一・二について極めて概論的に遊べてきたが、私たちは常に、幼児期に経験させておかなばならない望ましい経験の一つ一つを子どもの具体的な動きの中から見出す努力を続けると共に、その経験を十分体験させるにふさわしい保育のありかたをもとめていきたいものである。

(香川大学)